

---

# Letter

一条夕日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Letter

### 【Nコード】

N7351H

### 【作者名】

一条夕日

### 【あらすじ】

田舎で暮らす彼女と、都会で暮らす彼。簡単には会えないから、二人は手紙でお互いのことを伝え続けています。文通で繋がっている二人の恋の話です。

呼び鈴の音を受けて、クラウディアは出迎える足を玄関へと向けた。

扉を開けた向こう側にいたのはポストマン。

クラウディアは心を弾ませて、思わず出そうになった喜びの声を我慢した。

お届けです、と手渡されたのは簡素な、味気ない白い封筒。

自転車に跨り去っていくポストマンを見送ったクラウディアは、すぐに玄関を折り返した。

足取りも軽く、自分の部屋に戻ったクラウディアは机に向かう。

ペーパーナイフで封を切って、中から便箋を取り出した。

男性が書いたたにしては可愛らしい、ちょっと癖がある丸っこい字が並んでいる。

彼が書いた文章は彼女に色々なことを伝えてくれる。

空軍の飛行機乗りである彼がお仕事の最中に見た空のこと。

田舎暮らしのクラウディアが知らない都会のこと。

彼の飛行機を整備してくれる女の子のこと。

離れている時間を埋めるように、たくさん、たくさん、伝えてくれる。

二度手紙を読み返したクラウディアは机の引き出しを開けて、中から箱を取り出した。

箱の中には、今まで彼が送ってくれた手紙が全部入っている。

読み終えた一番新しい手紙を先頭に並べて、クラウディアは箱を引き出しへと戻した。

1929 / 4 / 29 ウイル・ガードナー

空軍の寄宿舎暮らしであるウイルは部屋に戻る途中に郵便受けを覗いた。

中には簡素な、可愛い水色の封筒が一通あった。

手にしたウイルは気持ちが悪く感じていくのを感じながら階段を上った。

部屋に入ると、荷物を床に放って机に向かう。

ペーパーナイフで封筒の口を切り開いて、中から便箋を取り出した。

そこには書いた女性の性格を思わせる、綺麗な字が並んでいる。

彼女が書いた文章は彼に色々なことを伝えてくれる。

飼っている猫が四匹も子を産んだこと。

都会暮らしのウイルが知らない田舎の素朴な風景。

ちよつと過保護な父親と、それを宥める母親のこと。

ウイルが送った手紙に負けないように、たくさん、たくさん、伝えてくれる。

一度だけ手紙を読んだウイルは、ベッドの下から箱を取り出した。箱の中には、今まで彼女が送ってくれた手紙が全部入っている。

読み終えた一番新しい手紙を先頭に並べて、ウイルは箱をベッドの下へと戻した。

1929 / 5 / 6 クラウディア・フィニーニ

しばらく時間が過ぎて、クラウディアに手紙が届いた。

白い封筒を手にして自分の部屋に戻ったクラウディアは、早速封を切って便箋を取り出した。

待ちに待った手紙は今回もたくさんのお話を伝えてくれる。でも、ちよつとだけ、クラウドディアは不思議に思うことがあった。彼は魚が嫌いだったはずなのに、友人を誘って食べに行つたと書いてあつた。

もしかして、都会の魚はおいしいのかしら。

それとも、あれだけ酷かつた魚嫌いが直つたのかしら。

今は手紙以外に彼を知ることが出来ないクラウドディアは色々なことを考えた。

今度、手紙で聞いてみればいいじゃない。

名案を閃いたクラウドディアは手を打ち合わせて、それから机の引き出しを開けた。

中から箱を取り出して、読み終えたばかりの新しい手紙を先頭に並べる。

箱を引き出しに戻したクラウドディアは、続けて別の引き出しから白紙の便箋を取り出した。

彼に伝えたいことならたくさんある。

それはもう、便箋一枚では到底足りないくらい。

筆を執つたクラウドディアはすぐに四枚の便箋を文字で埋めて、それを水色の封筒に収めた。

1929 / 5 / 9      ウィル・ガードナー

それほど時間も経たず、ウィルに手紙が届いた。

水色の封筒を手にして部屋に戻つたウィルは、重く息を吐いて封筒の口を切り開いた。

忘れる間もなく届いた手紙は今回もたくさんのお話を伝えてくれる。

だけど、少しだけ、ウィルは不安に思うことがあつた。

ウィルは魚料理が好きなのだけど、彼女は魚嫌いが直ったのかと興味を示している。

どうすれば上手く誤魔化すことが出来るだろう。

それとも、本当のことを伝えてしまうべきだろうか。

今はまだ自分のことを知られていないウィルは、どうするべきか悩んだ。

やっぱり、まだ決められない。

悩みを胸に秘めたままのウィルはベッドの下に手を伸ばした。

箱を取り出して、読み終えたばかりの新しい手紙を先頭に並べる。

箱をベッドの下に戻したウィルは、続けて机の引き出しから白紙の便箋を取り出した。

彼女に伝えないといけないことは、本当は一つだけしかない。

それも、便箋一枚といわず、一行だけでも構わないくらい。

筆を執ったが、ウィルの手は全く動かなかった。

数日掛けてようやく三枚の便箋を埋めたウィルは、それを白い封筒に収めた。

1929/7/19 クラウディア・フィニーニ

手紙を読み終えたばかりのクラウディアは小さな溜息を吐いた。

最近、クラウディアは悩んでいた。

自分が手紙を送ってから、彼の手紙が届くのが、だんだんと遅くなっている。

手紙の内容も、最初は便箋四枚だったのが、今では二枚にまで減っている。

どうしてなのか、クラウディアにはわからない。

仕事が忙しくて、手紙を書く暇があまりないのかもしれない。

疲れていて、多くの手紙を書くことが出来ないのかもしれない。

そうだったらしいのだけれど、と不謹慎な気持ちが胸に湧く。  
でも、クラウディアは不安だったのだ。  
もしかしたら自分は、彼に嫌われ始めているのではないかと。  
彼の姿が近くにあれば、彼の声を耳に出来れば、少しは自信が持てたかもしれない。

だけど、今はたった二枚の便箋しかない。

彼は本当に、忙しくて、疲れているのかもしれない。

仕方がない、と、そう思うしかない事情があるのかもしれない。

そんな中で手紙を送ってくれるのなら、彼はきつと自分のことを想ってくれている。

でも、自分は欲張りだ。

もっと、もっと、彼の言葉をほしいと思っている。

これだけでは、全然足りないのだ。

1929/9/3 ウイル・ガードナー

手紙を読み終えたばかりのウイルは深く溜息をこぼした。

今日も、ウイルは悩んでいた。

相変わらず、自分が手紙を送ってすぐに、彼女は返事を送ってくる。  
れる。

手紙の内容も、自分の手紙は少しずつ減っているのに、彼女は便箋四枚を必ず送ってくれる。

どうすればいいのか、ウイルにはわからない。

このまま嘘を吐き通して、彼女を騙し続けるべきなのかもしれない。  
い。

あるいは本当のことを伝えて、手紙の遣り取りをやめるべきなのかもしれない。

ロイドが生きていれば良かったのだけれど、と遣り切れない思い

が胸に湧く。

しかし、これが他ならぬロイドの頼みだったのだ。

死の間際にもロイドは彼女だけのことを想っていたのだ。

もし、言葉を交わす時間があれば、それは間違っていると断じていたかもしれない。

だけど、ロイドと言葉を交わす機会は、もうない。

本当に間違っていたのは、自分だったのかもしれない。

ロイドの頼みが間違っていることを確信して、最初から真実を伝えていれば良かったのだ。

せめて、もっと早くに間違いを正していれば良かったのだ。

でも、自分は臆病だ。

いつも、いつも、彼女を欺き続けている。

今度も、また。

1929/9/12 クラウディア・フィニーニ

とうとう、便箋は一枚だけになった。

彼は、よほど焦って手紙を送ったのかもしれない。

インクが完全に乾く前に便箋を折ったらしく、文字は僅かに掠れていた。

でも、忙しいというわけでもないらしい。

手紙の内容を見れば、分かってしまう。

知りたいことは、全然わからないのに。

どうして貴方は焦っていたの。

理由を聞きたい。

以前なら、手紙で聞いてしまおうって、すぐに思っていた。

でも、今は少しだけ怖い。

もし、聞きたくない返事が書かれていたらと思うと、怖くて書け

ない。

それに、たった一枚だけでも、このまま手紙の遣り取りを続けていられるなら。

一度だけ手紙を読んだクラウドディアは、机の引き出しから箱を取り出した。

面持ちを曇らせたまま、机の上に持ち上げる。

その途中、手から箱が滑り落ちて、中身がバラバラと雪崩落ちた。クラウドディアは慌てて手紙を拾い始めたが、それが逆に仇となってしまうた。

せつかく届いた順番に並べていたのが、すっかり混ざってしまったのだ。

仕方なくクラウドディアは封筒の消印を見ながら、日付の順番に手紙を並べ始めた。

最初は何気なく日付だけを見ていたクラウドディアは、ふと、送り主の名前に目を向けた。

名前の下には丁寧に住所が添え書きしてある。

だけど、おかしいと思った。

何十枚とある手紙のごく僅かに、違う住所が混じっているのだ。クラウドディアは彼の住所を覚えていたから、送るときも確認なんてしなかった。

だから今まで気付かなかったのだ。

住所は部屋の番号が違うだけで、些細な間違いなのかもしれない。でも、何か引つかかった。

都会に出ていって、少しずつ変わった彼。

でも、その変化を少し不思議に思うようになったのは、いつからだろう。

疑問に思いながら、クラウドディアは手紙を並べていく。

少しずつ並べながら、クラウドディアは疑惑に一つの過程を懐きつつあった。

そしてクラウドディアは手紙を並べ終わり、確信する。

住所の違う手紙。

それは、彼の変化を不思議に思った日付より後にしかなかった。

1929 / 9 / 15 ウイル・ガードナー

届いた手紙に、便箋は一枚しか入っていないかった。

内容を読む前から、嫌な予感がした。

それでも、読まないわけにはいかない。

そうして読み始めたウイルの目に最初に飛び込んできた一文は、  
衝撃だった。

あなたは、誰ですか？

しばらく、息も、瞬きも、何も出来なかった。

かぶりを振って、ウイルは続きを読んだ。

そこには、ウイルと、ロイドへの疑問ばかりが綴られていた。

最後に一文だけ、疑問とは別の内容が書いてあった。

もし全てが自分の思い込みで、手紙の送り主がロイド本人なら、  
一度だけでいいから帰ってきてください、と。

彼女の不安の大きさを示すかのように、疑問の数はとても多かった。

最後の一文は、そんな疑問を全て否定したいという、彼女の気持ちの表れだったのかもしれない。

手紙を読み終えた後、ウイルは思わず自嘲した。

結局、自分がしていたことは彼女を不安にさせていただけだったのだと。

深く息を吐き捨てた後、ウイルはベッドから立ち上がった。

机に読んだばかりの便箋を置き、別に白紙の便箋も取り出した。

彼女の便箋を脇に置いたまま、ウィルは筆を執る。

このまま、ロイドのふりをして手紙を送らなくても、全部解決する。

でも、それではいけない。

今からでも間違いを正そうと、そう決めたのだから。

彼女の便箋を埋める綺麗な文字。

その文字のいくつかに、インクが溜まって出来た小さな玉が残っている。

その玉の数だけ、彼女は筆を執る手を止めて、自分の迷いと戦ったのだ。

結果が怖くても前に踏み出した彼女の勇氣に、応えないわけにはいかなかった。

そうして書き上げた手紙は便箋六枚に及んだ。

もっと早くにこうするべきだった。

どこか清々しい疲労を感じたウィルは、初めて手紙を一日で書き上げていた。

1929/9/18 クラウディア・フィニーニ

手紙が届いた。

返事は、とても早かった。

それだけで、手紙の内容がわかる気がした。

部屋に戻って封を切り、便箋を取り出す。

目を通した内容に、全ての真実があった。

クラウディアが知る彼は、もうこの世の人ではなかった。

機体の墜落事故で、半年以上も前に亡くなっていた。

クラウディアが彼だと思っ込んでいた人は、同じく空軍で飛行機乗りをしているという彼の友人だった。

その友人は、彼の頼みで、ずっと彼を演じてクラウディアに手紙を送り続けていた。

今までで一番多くの便箋を送ってきた彼の友人は、彼女の疑問の全てに答えていた。

とても誠実に、分からないことも、自分なりの意見を懸命に書き綴っていた。

最後に、今まで彼女を騙していたことを謝罪して、手紙は終わっていた。

読み終えて、涙が一筋、頬を伝って落ちた。

ポタツ、と便箋に落ちて、文字を滲ませていく。

クラウディアは庇うように便箋を抱き締めた。

最初に落ちた一滴を追うように、次々と涙がこぼれていく。

どうして、彼が死ななければならなかったのか。

どうして、もっと早くに教えてくれなかったのか。

もっと、彼に伝えたい気持ちがあったのに。

ずっと、彼が帰ってくるのを待っていたのに。

手紙じゃ全然足りなかった。

会いたかった。

それなのに、どうして……

どうして……

ウィルは隣の部屋の郵便受けを覗いて、手紙がないことを確認した。

あれから、彼女からの手紙が届いたことはない。

本当のことを明かした今なら返事が来ないのは当然だ。

なのに、どうして確認してしまうのだろうか。

念のため、というには時間が経ち過ぎている。

それに、毎日確認する必要なんて、ないはずなのに。

ロイドのふりをして彼女を騙していたときには苦痛でしかなかった手紙。

それを心待ちにしているとでもいうのだろうか。

意外とそうなのかもしれないな、とウィルは階段を上って、自分の部屋に入っていく。

早めに休もうと思ったウィルはベッドに向かう途中、ふと、机の上を見た。

机は最後に手紙を書いてから使っていない。

机上には彼女から届いた最後の手紙が残ったままだった。

そういえば、とウィルはベッドの下に手を伸ばす。

取りだしたのは、手紙を保管している箱。

箱の中にはたくさんの手紙があるが、殆どはロイドに送られた彼女の手紙だ。

そして残りは、ロイドを演じたウィルに送られた彼女の手紙だ。

ロイドのふりをして手紙を書く参考に今まで借りていたが、それももう必要ないだろう。

ウィルは一度箱を開けて、少し迷ったが、騙していた頃の手紙も全て返すことにした。

一応、遺品ということになるのだが、ロイドの実家に送ろうとは思わなかった。

送り先には、家出同然に飛び出してきたという実家より、彼女の方が相応しい。

ウィルは久々に机に向かい、一筆認めることにした。

1929/12/11 クラウディア・フィニーニ

久しぶりに手紙が届いた。

それに、手紙と一緒に荷物まで。

手紙と荷物を持ったクラウディアは自分の部屋に戻って、まずは手紙の封を切った。

手紙の差出人には見覚えがあった。

彼に頼まれてクラウディアを騙し続けていた、彼の友人だ。

そういえば、あれから彼の友人とは手紙の遣り取りを行っていない。

彼のことを思い出するのが辛くて、彼の友人と何を話せばいいのかわからなくて、ずっと手紙を送れずにいた。

彼の友人は、こんな自分に何を送ってきたのだろう。

不思議に思いつつ、便箋の内容を目で追う。

そこには荷物の内容である、彼とクラウディアの手紙のことが書かれていた。

借り受けていた理由と謝罪の言葉が簡潔に書かれていて、それ以外には何も無い。

何故か、ちよつとだけ不満に思っている自分がいた。

どうしてだろう、と自分の感情を不思議に思いながら、便箋を傍らに置いて荷物に手を伸ばす。

包装を解くと、中から出てきたのは箱だった。

蓋を開けると、そこには大量の手紙が綺麗に整列して並んでいた。空の色だから、と必ず選んでいた水色の封筒。

クラウディアが彼に送った手紙だった。

そして、一部は彼の友人に送った手紙でもある。

彼の友人に手紙を送っていたのは、文通の相手が彼だと信じていたから。

真実を知った今、もうクラウドディアが彼の友人に手紙を送ることはない。

今までに何度も考えた。

何を話せばいいのかわからないとは別にある、彼の友人に手紙を送れない、もう一つの理由。

手紙を全て返されたことで、より実感が胸に湧いた。けれど、と、クラウドディアは思う。

机の引き出しから自分の箱を取り出して、彼の友人が送った手紙を取り出す。

真実を知って、改めて見てみると、やっぱり彼の手紙とはちょっと違う。

彼の丸っこい文字を必死で真似ているのがわかる。

彼とは違う、彼の友人の好きな物、考え方、色々なことが分かる。嘘だと気付かれないように、矛盾を上手く誤魔化しているのも、

今なら分かる。

クラウドディアは騙されていたわけではなかったのかもしれない。気付く機会はあったのに、ずっと目を逸らし続けてきた。

彼の気持ちが変わってしまったと思いたくなかったから。彼の身に何かあったとは思いたくなかったから。

でも、最後には向き合わざるを得なかった。

彼のことが好きだったから、誤魔化し続ける不安に耐えきれなかった。

そんなクラウドディアのことを、彼はわかってくれていたのではないかと思う。

いつか、クラウドディアは本当のことに気付く、と。

では、どうして彼は友人に自分のふりをして手紙を送ってほしいなどと頼んだのだろう。

クラウドディアが本当のことを知って、気まずいままに彼の友人と

の手紙の遣り取りを終える。  
それが彼の望んだ結末だったのだろうか？

1930/4/2 ウイル・ガードナー

ロイドと彼女の手紙を送ってからは、何か吹っ切れたみたいだった。

隣の部屋の郵便受けを覗く習慣は、あの日を境になくなってしまった。もし、最後に送った手紙に返事が来ていたら、とは考えなかった。少なくとも、それが届くのは、隣の部屋の郵便受けではない。ロイドではなく、ロイドの友人として送った手紙なのだから。だからといって、自分のところに彼女からの手紙が届くとも思っていない。

覗き込んだ自分の部屋の郵便受けは、今日も見事に空だった。ちよつとだけ残念に思いながら、自分の部屋に足を向ける。

肝心な部分は吹っ切れていないみたいだ、と、思わず自嘲したくなつた。

部屋に入って荷物を床に放りだすと、ウイルはベッドに身を投げ出した。

そのまま、ウトウトと意識が薄らいでいく。

気が付くと、窓の外には明かりが射していた。

うっかり一晩を寝過したらしい。

もう陽は高く、お昼に近いようだった。

少しお腹も空いたかもしれない。

ウイルは身を起こしてベッドから降りた。

そのとき、部屋の扉を叩く控えめな音が聞こえてきた。

気はいいのだが、粗野な連中が多い寄宿舎では珍しい。

寝癖が付いてないか気になる頭を手串で掻きながら、ウイルは部

屋の入口に足を運ぶ。

扉を開くと、部屋の前には見覚えのない少女が立っていた。淡いベージュのワンピースに黒いレースのボレロ。

洒落た服装とは少し不釣り合いに見える、つばの広い麦わら帽。顔立ちにあどけなさを残した、可愛らしい人。

会ったことはないけど、ウィルは少女を知っていた。

過保護な父親に買ってもらったお気に入りの服。

父親を窘める母親にもらった麦わら帽。

手紙を通じて、知っていた。

彼女は口元を綻ばせて、お届けです、とウィルに両手を差し出した。

その手には、ウィルが送った手紙入れの箱と、水色の封筒があった。

1931/3/18 クラウディア・フィニーニ

呼び鈴の音を受けて、クラウディアは出迎える足を玄関へと向けた。

扉を開けた向こう側にいたのはポストマン。

クラウディアは心を弾ませて、思わず出そうになった喜びの声を我慢した。

お届けです、と手渡されたのは簡素な、味気ない白い封筒。

自転車に跨り去っていくポストマンを見送ったクラウディアは、すぐに玄関を折り返した。

足取りも軽く、自分の部屋に戻ったクラウディアは机に向かう。

ペーパーナイフで封を切って、中から便箋を取り出した。

そこには書いた男性の性格を思わせる、硬い印象の文字が並んでいる。

ロイドがウィルに託した願いを知りたい。

そう願ったクラウディアがウィルに手紙を届けて、もう一年近くが過ぎた。

あの日から、クラウディアはウィルとの文通を再開している。

ウィルはクラウディアの提案に戸惑っていたが、最後には快く引き受けてくれた。

だけど、自分で提案したとはいえ、クラウディアも最初の手紙には何を書けばいいのか戸惑った。

ロイドに宛てていたときには便箋四枚でも足りないと感じるくらいだったのに、ウィルには一枚送るのが精一杯だった。

それはウィルも同じだったみたいだ。

返ってきた手紙にも便箋は一枚。

でも、そこにはウィルの言葉で、ウィルのことがしっかりと書かれていた。

ロイドのふりをしていたときに、ちょっとだけ覗いていたウィルの素顔があった。

返す手紙にそのことを認めると、次にクラウディアに届いた手紙には、君もだよ、と書いてあった。

クラウディアは不思議に思った。

自分のことは、ロイドに送った手紙にたくさん書いていたはずなのに、と。

返す手紙で尋ねてみると、次にクラウディアに届いた手紙には、ロイドのときとは違う君が見えた、と書いてあった。

ああ、そうか、とクラウディアは納得した。

そして、今になって改めて気付いた。

ウィルとロイドは違うのだと。

そういえば、クラウディアはウィルのことをよく知らない。

もっとウィルのことを知ろう。

そう思ってから、ようやくクラウドは、本当の意味で、ウイ  
ルに手紙を送れたのではないかと思う。

少しずつウィルを知って、少しずつ増えた、手紙の内容。

いつしか、知ろうという気持ちは、知りたいという気持ちに変わ  
っていた。

届く手紙と送る手紙

今ではロイドと同じ、便箋四枚。

(後書き)

拙い文章ですが、最後まで目を通して頂きありがとうございます。た。

よろしければ、本作に対するご意見・ご感想をお寄せください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7351h/>

---

Letter

2010年10月8日14時15分発行